

鴻 koh

月刊俳句誌

令和3年10月1日発行
(毎月1回1日発行)
第16巻第10号 通巻184号

10 月号
2021



縁に干す円座十枚盆の寺

仏法僧の声かと森を透かし見る

十六甕豆山の日がくる風がくる

町役場跡に狐の剃刀が

舟宿の盥の中の浮いて来い

草いきれ息整へて歩き出す

六人河岸

主宰作品

増成栗人

草かげろふ六人河岸に日の溜る

周五郎の宿の戸口に蚊遣香

しがらみの一つに飛べぬ草の絮

ばつたんこ過不足のなき雨となる

讃美歌の音がマロニエの花の道

弟が虫籠兄が捕虫網

白玉のぽかりと猿若町の午後

詩 作品抄

氷宇治食うべて土佐に生まれけり

森 祐 司

薄紙に甘き桃の香残りゐる

守屋久江

呉服屋の叶福助梅雨明ける

横尾かな

風鈴のさまざまな音を愉しめり

和田 遊

花手水まねて四葩を飾りけり

北城美佐

はつなつや薬膳カレーの具沢山

伊藤 隆

宵待草沖より舟の戻りくる

山崎正子

妹の忌なり筒鳥鳴く日なり

西條弘子

守宮鳴く臆病窓のある商家

飯田 節

気に入りの碗に八十八夜摘

北原沙織

ぬかるみにまだ新しき落し文

横山光榮

梅雨明けのバリウムの白雲の白

原 光 生

棲み慣れし草の戸青葉木菟の声

佐藤あさ子

笹百合の香は万葉の昔より

美濃律子

跳ぶ前の息ととのへし青蛙

井上つぐみ

破れ傘花壇に一人だけの昼

水谷はや子

眼下には大和三山枇杷を挽ぐ

松田那羅生

日盛りや次の一步が重たくて

畑田久美子

野辺渡る風の重たき桜桃忌

山内宏子

ほうたるほたるすぐ来いと言はれても

小林和子

増成栗人 選



第七回「鴻」俳句賞

入 選

第 一 位	「一陽来復」	北村 操
第 二 位	「緋梅白梅」	畑田久美子
第 三 位	「夕里の柚子」	山岸 明子
第 四 位	「うるこ雲」	針谷 忠郎
第 五 位	「春 隣」	田邑 利宏
第 六 位	「花を待つ」	足立 枝里
第 七 位	「団子屋」	鈴木 崇
第 八 位	「春立てり」	森 祐司
第 九 位	「仏の座」	相川 健
第 十 位	「花あせび」	伊藤 隆
第十一位	「喧嘩独楽」	松田那羅生

脚註名句シリーズ

「吉田鴻司集」

(俳人協会)

羊蹄山の残照となる暮の花 よつてい さんしやう いちばな 平成二二年作

〈峠越えただに俱知安の青山河〉
の源義の句碑が俱知安駅近くの公園
に建立された時に詠んだ句。

この雄大な句は、後に平成十六年
に、師の句碑の隣に建立されること
になる。薄紫の薯の花が夕日に染ま
り、抒情豊かな句が生まれた。

脚註「鴻」編集部

吉田鴻司脚註句集は右のように一句
一句に脚註を付けた句が三百句納め
られています。鴻司先生の俳句人生
を知る手掛かりになるように、編集
部が長い年月をかけて制作しました。

☆申込：「鴻」発行所

角川源義の叙情を出発点として
ベースとユーモア溢れた独自の句境へ。

指さして春禽の名を忘れたる

吉田 鴻司 全句集

A六判 三八〇ページ
定価三、〇〇〇円



俳人協会賞受賞句集「項目」はじめ「平生」「山彦」「神楽舞」
の四句集と「脚註俳句名句シリーズ」編集吉田鴻司集の拾遺
と「平生」以後の遺句の抜粋一七九六句と増成果人
谷口摩耶はじめ「鴻」会員十三名による「吉田鴻司・人と
作品」を収録。初句索引、季題別索引付。

発行所 鴻発行所 出版局

申し込み

○「鴻」の誌名のもとになった吉田鴻司先生の句集の集大成です。発
行所へ直接連絡したくか、「鴻」誌巻末の投句用紙裏の envelopes
用紙に「吉田鴻司全句集」○冊希望と記してください。
○送料は定価に含まれています。

第七回「鴻」俳句賞

受賞作品

一陽来復

北村 操

御初天神止め腕に手鞠の麴
風光る矢切りの里の舟のりば
涅槃西風櫓舟は波に暮れゆきぬ
菜の花やどどと山羊のくる牧場
まんまるな廟の飛び石初桜
二隻ゐて背中合せの蜷舟
父の日の仏に濃茶たつぷりと
河鹿笛一本橋がせせらぎに
青くさき風の蹤きくる孕鹿
白南風や埠頭にかもめ並びゐる

鴻司忌のそれだけで足る星月夜
鳶舞ふや寝釈迦のごとき紅葉山
夕紅葉瀬音は湯の香淡くせる
飛蝗とぶ川を渡れば帝釈天
雁渡し野菊の墓に香の跡
乾鮭に雲の流るる速さかな
白鳥に瓢湖の闇の降りきたる
冬日ちらちら布団屋の棹秤
一茶忌や田に荒星の落ちさうな
一陽来復親鸞の偈を聴きぬ

1 位

俳誌のサロン

緋梅白梅

畑田久美子

緋梅白梅枝垂れて寺の華やげる
春田打つ農夫の肩の力かな
早春の木々の膨らむ気配して
一夜だけ飾りし陶の雛人形
仕上げには菜の花散らし雛の膳
五風十雨春の恵みを賜りぬ
紅梅の散りて明るき夫の墓
ふらここを架けたくなりし大樹かな
玻璃越しの鳥に声かけ春炬燵
半鐘の錆びし櫓よ下萌ゆる
涅槃西風魚の半身食べきれず
マスク選ぶラッキーカーの黄の色を
椀種のはまぐり届く宅配便
大仰な三寒四温菜を洗ふ
枯れ蔓の巻き付く火の見櫓かな
雪くるか秩父連山凜として
風強し抜歯のやうな大根畑
寒夕焼籠りゐる日々恙なし
空の青臘梅いよよ匂ふかな
自粛解除象は毬蹴る花の下

2 位

夕里の柚子

山岸 明子

ことさらに瀬の青き日よ冬に入る
銀杏落葉灯のともりゆくカフェテラス
冬茜影絵の街に佇めり
冬夕焼ムンクの景を鳥過る
獣らも息潜め待つ初日の出
朝十時羽搏きさうなシクラメン
梅林の日差しやはらか母の忌来
本棚の奥から童話春来たる
水底の影ゆうらりと春の鯉
夜の静寂さくらの精の気配して
蟬時雨ゲルニカの書を読みてをり
穏やかな安房の海坂夏逝けり
西瓜切るその鋭角の美しきこと
生終へる秋蟬の目に碧き空
夕暮れのメタセコイアに秋の声
雨あとの茗荷の花の開けさよ
蛇穴に入る青空を眼裏に
夕里の柚子の実小さき灯のごとし
月明の案山子は何を思ひしか
金色の風を纏ひて夕芒

3 位

俳誌のサロン

つるつる雲

針谷 忠郎

初日記言ひ遺したきこと数多
鯉跳ねて赤きつつじの返り花
冬うらら露座大仏の細き眼よ
土筆摘む土の匂ひを嗅ぎながら
ふんはりと筑波を隠す春の雲
風光る勿来の関を越ゆるかな
走り根につまづく小径地虫出づ
未つ子を守る実家の彼岸かな
花のもと五百羅漢の人くささ
桜咲く城の石垣苔生せり
万緑や五家荘への峠道
明易や朝餉の前の三千歩
生垣の雨滴きらめく蜘蛛の糸
やせ畑のやつと開きし茄子の花
朝採りの曲がる胡瓜の雫かな
うろこ雲一茶の句碑のほの白し
赤のまま子の駆け巡る広野原
線香のまばらな秋の彼岸寺
柿の木の実のつきしまま枝下ろし
手に馴染む薩摩切子や今年酒

4 位

春隣

田邑 利宏

春宵の街の華やぐ駅ピアノ
春愁の上野のカフェのマチスの絵
夕月のこぼれてゐたり紫木蓮
写メールに春風ふはり椿山荘
石鹼玉飛ばせ明るき空へ向け
珈琲に羊羹が良し傘雨の忌
日を浴びて天衣無縫の立葵
白南風や開けつ放しの自動ドア
水の近江涼風そよぐ一人旅
雲の峰湖北に多き観世音
念入りに洗ふ指先涼新た
さはさはと風の遊べり竹の春
里山にただ秋風と濃き夕日
花サフラン港の見えるレストラン
スコッチと村上春樹夜半の秋
山に雪人影もなく道の駅
だみ声のサッチモの声雪くるか
月光の凍てて丹後の奥にある
遠山の見え寒暁の瑠璃色に
帽子屋に帽子あふるる春隣

5 位

花を待つ

足立 枝里

平日の長き散歩と日向ぼこ
床屋にはおじさんばかり年の暮
緊急事態宣言再度冬籠
毛糸帽被りどこにも行かぬなり
ときをりは雪の降りやむ雪見酒
通勤のマスク行進渋谷駅
ペット屋の声の賑やか春隣
壊してもこはしてもまたしやばん玉
花の咲く前のしづけさ立子の忌
都庁舎の裾野に彼岸桜かな
入社式靴の中の胃腸薬
客待ちの運転手らに花の雨
大勢で来て無言なる花見客
補助輪を外す約束花の午後
囀りと葉のさざめきと鳥の影
桜守だけの知る花吉野山
空缶を蹴る春愁の音させて
繰返し歌う懐メロ春夕焼
草餅や旅の時間のすこし伸び
清和なる青空ブルーインパルス

団子屋

鈴木 崇

ゆく秋の歓声を待つ競技場
湯豆腐や由緒刷らるる箸袋
湯屋の籠いつばいに服星冴ゆる
刀鍛冶祀る社よ冬紅葉
日短し亀岡牛に赤ワイン
川下る緩き鰯拍子冬の空
楽しい日楽しきままに蕎麦湯飲む
京中のちんちん電車身も冷ゆる
銀杏散る惜しむことなき眩しさよ
団子屋の醤油香ばし年つまる
吹きぬけをしばらく見上げ冬うらら
小寒や濁りを排す川の色
剃刀の痕隠したるマスクかな
時短営業寒九の雨となりけり
境内をぐるり三山日脚伸び
実時の宝篋印塔笹子鳴く
春近し八景島を眺むれば
手袋の十指靡線跡の道
チョコレート二枚を母に水温む
のどかさや寄席中継と餡パンと

春立てり

森 祐司

菜の花の先まで駅の数いくつ
一人乗るエレベーターの隙間風
囀がどこかに路線図を見上ぐ
売店のガムの品数山笑ふ
冬の果駅の蕎麦屋のあかあかと
天井高き待合室の大マスク
切符水色二月の海を見に行かな
手袋の座して互ひの黙の距離
梅の香突いて貨物列車がしばし
下りホーム人待ち顔の雪女郎
冴返るパンタグラフの青火花
遠富士へ一気といふ空春立てり
畦を焼く火が鉄橋を煙らせる
枕木に微動の名残り鳥雲に
上りには上りの汽笛柳の芽
保全夫の眠り束の間涅槃西風
淡雪の鉄路の上を明るめり
先頭車大きくカーブして臍
木の芽雨なほも靴に旅ごころ
浅春の夜汽車が夢を運びけり



羽音集

増成栗人 選



空蟬や逢ひたき人に逢ひに行く
香草をふんだんに入れ夏料理
花手水まねて四葩を飾りけり
打水やお勝手口のある暮らし
子の部屋のリフォームを決め秋が来る
澄めるだけ澄む噴井あり魚の影
豆腐屋がくる夕焼の辻へくる
待つといふひとときメロン切り分けて
ほうたるほたるすぐ来いと言はれても
夏蝶の瑠璃が水辺の草叢に
守宮鳴く臆病窓のある商家
早乙女は遠き記憶よ田が植わる
ゆすらうめ真紅のままに落ちにけり
ふるさとの富士の湧水冷奴
藍浴衣ゆく大川の舟着場
夏痩せや体重計のデジタル音
一斉にスマホを向ける二重虹
梅雨明けのバリウムの白雲の白
草いきれ同心円の刈目かな
自転車の並ぶ駄菓子屋とてころん

札幌 北城美佐

土浦 小林 和子

流山 飯田 節

伊勢崎 原 光生

仏の座

相川

健

名を聞けば畏れ多くも仏の座
春立つ日なりパレットに色を溶く
堅香子の咲いてやさしくなりし山
風やさし芽ばり柳のうすみどり
三つ買ひ一つ仏壇桜餅
風光るカルパッチョには赤ワイン
鷹鳩と化しほどよき距離をとる
緋梅白梅四阿によき風の来て
靴底にかすかな温み春の土
踏場なきほどに沼辺のいぬふぐり
盆梅の苔むす幹の孤高たる
弥生寒更地となりしパチンコ店
雲雀野をゆく久に聞く国訛
赤人の摘みし野中のすみれ草
花の夜は島で求めし栗焼酎
今年また枝垂桜に会ひにゆく
円山から八坂へ桜月夜なり
花は散りにけり虚子忌を前にして
置き去りのボールがひとつ飛花落花
俳諧の道ゆくほどにかげろへり

花あせび

伊藤

隆

日めくりの日めくりそびれや彼岸明け
寝不足に白湯流しをり今朝の春
踏切の鐘のリズムや著我の雨
辛夷咲く車椅子引く中学生
シャボン玉吹く兄弟のおちよば口
あたたかや小銭を渡す父の肩
春の昼列車行き交ふガード下
靴底の軽しほつぽつ猫柳
春嵐点字ブロック色褪せて
花どきや旅籠屋裏の舳ひ船
花ミモザさくりと最中より餡子
ふらここや大人も乗りてみたきもの
嬬やかな枝ぶり落ち椿の黙
大和路を北へ北へと花万葉
花あせび古刹の門の閉ぢられて
木瓜の花久闊を叙す書の同志
亀鳴くやポンドにつなぐ古墨かな
下萌にギター爪引く二人組
桜食む二頭の鹿の立ち姿
山里の刃物屋へ寄る雪柳

喧嘩独楽

松田那羅生

いかのぼり青畝の山の風掴む
父が描くピカソめきたる福笑ひ
必勝の口伝の術の喧嘩独楽
喧嘩独楽投げて引く一瞬が技
障子明りに妻が折る紙雛
はなやかに男の子ばかりの雛の家
負け独楽のかちかちと弾けたり
勝ち独楽の山の如くに動かざる
二上山の芽吹き初めたり縄電車
縄電車紋白蝶があとさきに
風船を持つ子が二人縄電車
草笛の子の待つてゐる縄電車
雀の巣あるらし軒を縄電車
縄電車つくしを摘みて乗り遅る
爺と子の真剣勝負木の実独楽
木の実独楽二つはいつもポケットに
幼稚園菜の花畑の真ん中に
宅急便開けば花の香のしたり
雲雀鳴く丘が終点縄電車
ふらここや葛城山の暮れ残る

9位

10位

11位

ON THE STREET

— 平山雄 —



173

『吉田鴻司集—脚註名句シリーズ—』

増成栗人・編 俳人協会・刊

「松が瞰（み）るげんげ田の果の一生家」

昭和三五年

「巫女（いたこ）の座する一枚の灼け筵」

昭和三八年

「脱ぐ手套」は慣れない鉄工所務めをして

いた時期の句。その後、源義の紹介で角

川書店の仕事に就き、赴任先で近隣住民

の暮らしに溶け込む頃に「松が瞰る」が

詠まれた。そして「巫女の座」は源義の

民俗志向に触発されて生まれた一句。こ

うしてみると鴻司の人生と俳句が源義に

よって急速に変化していく様が、句と脚

註を通して手に取るようにわかる。

「生るるより烏揚羽の神楽舞」

昭和五一年

源義の下での研鑽を経て、鴻司はこの

スタイリッシュな句境に行き着いたの

だった。

吉田鴻司集

増成栗人編

「山粧ふ赤無の婆より買ほか」

昭和五一年

「冬空のうるはふばかり障子貼る」

昭和五一年

この時期の句を読んでいて気付いたこ

とがあった。「山粧ふ」と「赤無」、「冬空」

と「障子貼る」など、季重なりの句が多

く目につくのである。昭和の俳壇は季重

なりを、今ほど□□するさく言わなかった

のではないかと思われる。これらの句を

読むとおおらかな抒情が句を満たしてい

て、その後の鴻司俳句の片鱗が伺え、と

ても興味深い。

「塩壺のことりと月の上るる」

『鴻』9月号巻末の編集後記に「吉田鴻

司脚註句集」が完成したと告知があった。

増成栗人主宰を編者として、鴻の連衆の

方々が何年もかかってまとめあげた力作

である。収録句は三百。第一句集『神楽

舞』から第四句集『平生』以降までが網

羅されている。添えられた脚註には、鴻

司師の歩まれた人生が細かに記されてい

る。第三句集『頃日』の少し前からの師

しか知らない僕にとって、本書は改めて

師の人間性に触れる絶好の機会となった。

生前にご一緒した句会後の酒席で、師

が語る人生は断片的なものであった。こ

の本の醍醐味のひとつは、そうした断片

をひとつに繋げる評伝のような側面であ

る。たとえば師は角川源義と出会う前に

俳歴があったのにも関わらず、それらを

すべて捨て去って『神楽舞』を発表。正直

その覚悟と源義に寄せる思いのすべてを

僕は理解できなかった。それでも句と脚

註を合わせて読んでいくと、少しずつ師

の真意が伝わってくる。

「脱ぐ手套（てとつ）なほ鉄握る形して」

昭和三四年

「沢蟹をカリリカリリと文化の日」

昭和五十年

「七面鳥くるくるる水温む」

昭和五四年

「塩壺の」の句の脚註に、鴻司はよくオノ

マトペを使ったという指摘があった。確

かにそうなのである。そのオノマトペは

童唄のような響きを持つていて、塩壺の

立てる「ことり」という音がまるで「月

の上る」音かのように聴こえてくる。「カ

リリカリリ」も「くるくるくるる」も同

様に、「文化の日」や「水温む」を鮮やか

に形容している。

「雑炊をほつほつ喰つ三鬼の恋」

昭和五九年

「即身佛の寺にしゆるしゆるすいき刺く」

平成元年

これらの句も鴻司独自のオノマトペを
得て、温かな余韻を残す。

「なみなみと花屑を今吉野」

昭和六十年

「はこべらの花のをきなき使芸天」

平成三年

「出羽びとの雪を加へて鋤き返す」

平成五年

平成六年に上梓された『頃日』あたり

から、ユーモアのセンスが句の前面に出

てくる。源義から受け継いだ学究的なア

プローチや歴史観が熟成されて、それま

での句の厳しさに微笑のような光が差し

てくる。「なみなみと」は、僕が特に好き

な句。花の吉野の入口に立つて、逸る気

持ちを川面に泛ぶ花屑に託す。そんなに

焦らなくとも、吉野には中千本も上千本

も奥千本もあるのだ。「使芸天」を「をさ

ない花」と並べてみせるのもまた、佳境

に入ったればこそその微笑みだろう。「出羽

びとの」の句は、「鋤き返す」土に「雪」

を調味料の塩のように加えているようにで

暮らしの中の機微がそこに息づいている。

「バレンタインデーと言ふ日の佐渡が見

ゆ」

平成七年

この句の脚註には「作者の若い頃には

無かった日である」と記されている。鴻

司は新しい季語に対して、躊躇いなくチャ

レンジする若々しい心を持っていた。「バ

レンタインデー」の他に、ジョン・レノ

ンの忌日の句にも挑戦している。師は句

会メンバーとの雑談の中でも、新しい事

象や風俗を吸収することに貪欲で、テレ

ビのコマーシャルにも詳しく何度も驚

かされたことがあった。

「父母の知らぬ傘寿の暑さかな」平成十年

「羊蹄山（よつてい）の残照となる暑の花」

平成十一年

晩年の句群である。「父母の」は、脚註

にご自身の傘寿の祝賀会での句であった。

父母の生きた年齢をはるかに越えて迎え

た傘寿の感慨を、句として遺せた師の幸

せを感じる。「羊蹄山」は、北海道の函

館本線倶知安駅に隣接する公園に、源義

の句碑と並んで建立された鴻司の句碑に

刻まれた一句。僕はここに何度も足を運

んでいるが、本書に触れてまた行ってみ

たくなった。

久々に師の句と対峙し、懐かしく思う

と同時に新しい発見もあった。そのチャ

ンスを与えてくれた本書に感謝したい。

脚註執筆者及び編集者の皆さん、本当に

お疲れ様でした。そして扉ページの写真

の鴻司師の笑顔が本当に懐かしい。『鴻』

衆の方々、ぜひ「一読を！」

「扇置くつぎ雲の湧く日なり」

半谷洋子

茶庵閑話 40

虫丸

